

学位論文要旨

和歌山大学大学院 観光学研究科 博士後期課程

森田 浩司

現在、ウェルネスツーリズムは世界的に注目され、産業的な発展をとげている。本論文は、このツーリズムをテーマとし、先行研究の検討を通じて、ウェルネスツーリズムの定義と範囲を明確化し、これを土台に、日本のウェルネスツーリズムの実情と特徴を明らかにすること目的としている。

ウェルネスツーリズムの中心となる「ウェルネス」という言葉は、治療の観点から見た健康とは異なる心身の健やかな状態を指しており、1950年代に Halbert Dunn によって提唱されて広まった。これを目指すツーリズムへの社会的関心の高まりを受け、欧米においては、ウェルネスツーリズムの研究は、理論的探求から事例調査まで多岐に渡って蓄積されてきた。一方、日本では、事例調査は増えつつあるものの、いまだに研究の蓄積が十分とは言えない状況にある。とりわけ、ウェルネスツーリズムの概念は、様々な定義の間の矛盾や実情との齟齬があるにもかかわらず、学術的検討がなされないままに特定の解釈が引用されることが多い。そこで本研究では、第1の課題として、欧米のウェルネスツーリズムの先行研究の検討を通じてウェルネスの定義と範囲を確定することにした。この課題においては、健康と関わる他のツーリズムとして、ヘルスツーリズムとメディカルツーリズム、スパツーリズムにも目を向け、これらのツーリズムとウェルネスツーリズムの関係性についても検討することにした。第2の課題は、これを日本の事例に応用し、日本のウェルネスツーリズム事業の特徴と実情を分析することである。

第1の課題について、欧米の先行研究を検討した結果、本論文では、ウェルネスツーリズムを「ウェルネス、すなわち body (身体)・mind (心)・spirit (人智を超えた力・生命エネルギー)・environment (環境) といった総合的な観点から、健康的な思考や活動を通じて、自ら積極的に健康で充実した人生を達成・維持・増進していくことを示す概念を体現する、医療目的でなく自発的に行われるツーリズム」と定義づけた。このツーリズムとヘルスツーリズム、メディカルツーリズムとの関係性については、まずヘルスツーリズムの下に他の2つが位置づけられるとした。ウェルネスツーリズムとメディカルツーリズムの関係については、ある程度の連続性が認められるものの、受け身の医療行為の有無によって区別されうるとした。さらにウェルネスツーリズムを旅行者の目的・行動を基準に細分化し、旅行者が専らウェルネスに係る行動のみを目的とするものを「第一義ウェルネスツーリズム」、旅行中の複数の行動の中でメインとする目的がウェルネスに係る行動であるものを「第二義ウェルネスツーリズム」とし、各々の内に「レスト型」・「アクティブレスト型」・「メディカルウェルネス型」の3つのカテゴリーを設定した。また、ウェルネスツーリズムに完全に包括されるかどうかで議論されてきたスパツーリズムについて、旅行者が利用するスパの種類によって、ウェルネスツーリズムにもメディカルツーリズムに

もなりうる両方に跨るツーリズムであると結論づけた。

第2の課題については、本論文で定めたウェルネスツーリズムの定義に該当する44の事業例を調査した。この事例分析を通じて、日本におけるウェルネスツーリズムの現状として、以下の点を確認できた。まず、完全に受身的なメディカルツーリズムの範疇にある事業の取り組みが少なく、ウェルネスツーリズムの範疇に当たる取り組みが極めて多い。また、ここで挙げたウェルネスツーリズムの事業例は、ツーリストが取りうるウェルネス滞在スタイルの観点から、(1)宿泊施設内完結型、(2)宿泊施設内+周辺環境利用型、(3)宿泊施設外の施設・プログラム利用型、(4)周辺環境利用型の4つに分類しうると考えた。

次に、上記4つの分類それぞれに該当する事例を挙げて、プログラムやサービス内容、集客方法について、詳細に検討した。そして、その結果をふまえ、日本のウェルネスツーリズム事業の取り組みにおける問題点を示し、その改善に向けた提案も行った。

本論文で確認できた第1の問題は、日本では、幅広いウェルネス需要に対し、ウォーキングプログラムや食事提供などの限定されたプログラムやサービスによって部分的にしか充足できていないという点である。これを改善するにあたり、より多様なウェルネスツーリズム需要の受け皿が必要であるが、施設あるいは自治体単体での取り組みには限界がある。そこで、提案したのは、自治体と民間双方の得意分野を活かし補完しあう協業である。また、提供するプログラムの充実には欠かせない講師の確保は、特に大都市から離れた地域では困難となる。そこで、人材派遣システムの確立で対応することを提案した。第2の問題として、周辺環境利用型のウェルネス滞在スタイルの推進の難しさを挙げた。これについては、訪問者が各自で環境を利用したウェルネス滞在の仕方を見つける助けとして、事業者がモデルとなるウェルネス滞在プランを発信していくことを提案した。第3の問題として、メディカルウェルネス要素の強い欧米のウェルネスツーリズム理論や取り組みは、ともすれば日本の観光実態にはそぐわない点があることを示し、日本に適用する際には十分に注意する必要があるとした。最後に、ウェルネスツーリズムやヘルスツーリズムにおいては、人材や設備確保の観点から大量集客は難しく、集客数ではなくリピーターや地域のファンを増やす前提で進めていく必要があることを指摘した。

以上のように、本論文は、これまで日本で十分に検討されてこなかった欧米の先行研究におけるウェルネスツーリズムの概念を吟味し、より妥当な定義を示すことで、本領域の研究の深化に貢献している。また、事例分析に基づいて、日本のウェルネスツーリズム事業の問題を浮き彫りにし、適用可能性の高い具体的な改善案を提示していることから、今後のウェルネスツーリズム事業の発展にも寄与するものと考えられる。